
『源氏物語』における 過去分詞的名詞修飾の一典型

釘貫 亨

1 日本語ヴォイスの特異性

日本語は、伝統的に形容詞の語彙が不足していると言われることがある。形容詞の不足を補うために平安時代語ではク活用、シク活用の専用形態に加えて、「高かり・恋しかり」のようないわゆるカリ活用形容詞や状態の意味を持つ名詞「遙か、静か、常磐」などに断定辞ナリを付接する「形容動詞」が増産されるなど、既存の形態だけでは状態の意味の伝達要求のすべてを収容できなくなっていたことを示すものであろう。

ある品詞の意味表示の欠落を別の品詞の形態をもとにして補うのが派生という現象であるが、日本語形容詞もこの恩恵にあずかっている。古代語では、例えば動詞から派生したシク活用形容詞群の一部は、「たくまし（たくむ）、よろこばし（よろこぶ）、うるはし（うるふ）、はづかし（はづ）、ゆかし（ゆく）」のように心情的意味を持つ動詞群を資源にして一群の感情形容詞を増産している。謂われるところのシク活用形容詞の情意的意味とは、このような派生関係に由来する¹⁾。また、「白し、黒し、浅し、固し、深し」など名詞を語幹にした形容詞群も有力な位置を占める。これらの派生関係に由来する形容詞群は形態的痕跡を身につけているので、これまでの形容詞研究に一定の蓄積を持っている。

その一方で、従来、ほとんど注目されてこなかったものに統語構造に由来する動詞の形容詞的用法がある。西洋文法において、それらは現在分詞、過去分詞と呼ばれるものであるが、例えば英語では *ing* または *ed* その他の形態的特徴を備えているが故にこれらは独自の扱いをされている。日本語には、英語の現在分詞や過去分詞のような形態的特徴を備えたものはないが動詞の形容詞的用法そのものは存在すると考えられる。それは、動詞の名詞（連体）修飾構造の中に見いだされるものである。例えば

ヒグラシの鳴く夕暮れ 悪夢を見た翌朝

における「鳴く・見た」は、いずれも「ヒグラシ（主格）」「悪夢（目的格）」という述語動詞にとって必須とも言える統語項を伴っている。これらの句をヨーロッパ諸言語に翻訳した場合は、関係代名詞を導入させる必要がある。これらの「鳴く・見た」は形容詞的用法と考えることが出来ず、複雑な統語構造を伴った名詞修飾と言うべきものである。これに対して、例えば

荒れる天候 降る雪 枯れた風情 失われた記憶

などにおける「荒れる・降る・枯れた・失われた」の名詞修飾のあり方は、先行する統語項なしにそれ自体でまとまった表現として成立しており、極めて多様な文脈において安定的な意味実現をなし得るのである。これらは、まさしく動詞の形容詞的用法というべきものである。ヨーロッパ諸言語では、これら動詞の形容詞的用法を分詞 *participle* と名付けて一文法範疇を構成しているのである。既存の日本語法は、今のところ分詞に相当する文法範疇を持っていない。しかし、見たように分詞に相当する文法的現象は、存在するのである。

日本語法が動詞の形容詞的用法という文法範疇に注意を払わないのは、日本語が英語のような現在分詞＝(ing)、過去分詞＝(ed その他)の如き形態的標識を持たないからであろう。「ヒグラシの鳴く夕暮れ」と「荒れる天候」における「鳴く」と「荒れる」の用法の違いは、統語項を取るか取らないかによって消極的に区別されるに過ぎない。この消極性が日本語動詞の形容詞的用法に対する文法学者の注意を妨げてきたのではないか。

日本語動詞の形容詞的用法の古例はすでに奈良時代において認められる。

降る雪（布流由吉）の白髪までに大君に仕へ奉れば貴くもあるか

（万葉集巻17・3922、天平18年、橘諸兄）

君により我が名はすでに竜田山絶えたる恋（絶多流孤悲）の繁き頃かも

（同巻17・3931、天平18年、平群女郎）

上の例の動詞句「降る雪」「絶えたる恋」は、先行する文脈に依存せず、独立して成立しており、これらを切り取って多様な文脈の中に挿入することが可能である。「降る」「絶えたる」が動詞の形容詞的用法であることに疑問の余地はない。「降る」と「絶えたる」の違いは、英語で言えば現在分詞と過去分詞の違いに対応すると言いたいところであるが、彼我の事情には多少の相違がある。「絶えたる」のような過去情報が介入する形容詞的用法は、過去の動作や作用（絶ゆ）の結果が今に及んでいることを表す点において英語の過去分詞用法、例えば *broken door* などと同様であるが、日本古代語の場合、資源となる動詞群は自動詞に偏ることが分かっている²⁾。英語の過去分詞用法の資源となる動詞は他動詞であり、古代日本語と対照的である。その結果、日本語の「過去分詞」は、受動性を表すことが出来ず、自発性を主たる意味核とする。

よく知られているように上代語の受身助辞「ゆ・らゆ」は、文法的機能が極端に貧弱

で類型的表現の中で化石的に残存するに過ぎない。現代日本語の受身助辞「れる・られる」は、平安時代以後、文献に見いだされる「る・らる」を継承したものである。おもしろいことに「る・らる」の成立と軌を一にして使役助辞「す・さす」も出現したのであり、上代語の受身「ゆ・らゆ」、使役「しむ」とひと揃いで交替した。この事実は、平安時代以後の日本語の文法範疇である受身が使役と対応することを形態的に示しており、その点において英語その他ヨーロッパ諸語の受動態 *passive voice* が能動態 *active voice* と対応することと明確に異なっている。日本語の受身は、英語などの受動態と同一視することが出来ない。英語その他の受動態は、過去分詞を材料にするが故に、過去情報が前提的に含まれていると言われている³⁾。これに対して日本語の受身は自発性を旨とするので過去情報が含まれておらず、したがって *broken door* を日本語訳する場合、「破られる扉」と直訳したのでは真意が伝わらず「破られた扉」と過去情報を補う必要がある。英語の受動態は、能動態と対立するが故に受動性を明確に表現することが出来るが、日本語の受身は、「自ずから然る」⁴⁾自発性を意味の中核にしているので受動性を十分に表現することが出来ない。受動性を十分に表現出来ないと言うことは、日本語の文法体系が受動性の概念を客観性を伴って明確に把握し、これを自由に文脈上に実現することが出来ないことを意味する。すなわち伝統的日本語受動文が無生物を主語に取らず、話主を典型例として有情の者を主語に取るいわゆる迷惑文を特徴にするのは、このことに起因する⁵⁾。

2 日本語における過去分詞の発達

排他的な関係にあったと思われる上代語の受身と使役の形態「ゆ・らゆ」「しむ」が奈良朝から平安朝の境にかけて何故突如としてシンメトリカルな「る・らる」「す・さす」と入れ替わったのか。それは、日本語の特徴である自動詞と他動詞の形態的対応関係が奈良時代に多量に産出されたことと関わっている。すなわち、古代語動詞の自他対応は、

第Ⅰ群形式

- 入る（四段自）——入る（下二段他）
- 浮く（四段自）——浮く（下二段他）
- 切る（下二段自）——切る（四段他）
- 払ふ（下二段自）——払ふ（四段他）

第Ⅱ群形式

- 寄る（自）——寄す（他）
- 成る（自）——成す（他）
- 残る（自）——残す（他）
- あらはる（自）——あらはす（他）

第Ⅲ群形式

出づ（自）——いだす（他）

濡る（自）——濡らす（他）

上がる（自）——あぐ（他）

曲がる（自）——まぐ（他）

のような三種類の形式を持っており、現代語に至るまで原則的にこれを保持している。このうち特に語尾ル（自動詞）－語尾ス（他動詞）という積極的な標識を伴う第Ⅱ群と第Ⅲ群の形式が奈良時代に多量に進出してきた。「る・らる」と「す・さす」は、この自動詞語尾と他動詞語尾の対立関係に類推して分出してきた助辞であると考えられる⁶⁾。

すなわち、平安時代以後の日本語ヴォイスの体系は、上代以来の動詞自他对立をシメトリカルに拡張して成立したもののなのである。これは、西洋語のヴォイスとは似て異なるものであり、日本語独自のものである。平安時代以後「る・らる」「す・さす」は、奈良時代以前の「ゆ・らゆ」「しむ」とは違って旺盛な文法的活力を獲得して今日に至っている。

ところで日本語の過去分詞は、動詞に過去情報を持つ形式を付接することによって作ることが出来る（「枯れた風情」「晴れた空」など）。英語の場合、他動詞の過去分詞がこれに当たる。英語の過去分詞は、受動態の資源でもあるので、他動詞を主たる資源にした英語の過去分詞とは事実上他動詞を自動詞に変換した形態である。英語と対照的に古代日本語の過去分詞の資源は、ほとんどが自動詞から得ている。その理由は、古代日本語では他動詞を自動詞に転換する手段がなかったからである。もちろん理論的には、他動詞に受身助辞を接することによって、

失われた信頼 約束された土地 閉ざされた門

のような過去分詞的用法を得ることが出来るが、これらの表現は近代以後成立したのである。奈良時代語の受身自発助辞「ゆ・らゆ」は、文法的機能が極端に貧弱で使い物にならなかった⁶⁾。「ゆ・らゆ」は、奈良時代においてすでに典型的、固定的表現の中にしか現れず（「ねのみし泣かゆ、人に知らゆな、いの寝らえぬに」など）、造語生産性は全く期待できなかった。平安時代以後「す・さす」とともに「る・らる」が出現し、文法的機能が飛躍的に向上し、後述するように漢文訓読と近代における欧文翻訳の経験を重ねて、我々は「る・らる（れる・られる）」の形態を通じて文章上に自由に受動性を表現できるようになった。しかし、欧文の受動態が過去情報を前提的に具有することに比べて、日本語の受身は自動詞標識に由来する自発性を中核的意味にしている関係上、過去情報を前提的に保有していない。ここに過去からの時間の幅を持つ欧語受動態とそれを持たない日本語受身の意味上のずれに留意する必要がある。すなわち broken door は、「破られる扉」と「直訳」するのではなく、「破られ・た扉」と過去情報を補って邦訳しなければならないのである。「扉を破る」という過去の動作の結果が現在に

及んでいることを「破られた」とすることによってのみ表現できるのである。

ともかく、上代語の「ゆ・らゆ」と違って旺盛な文法的活力を持つ「る・らる」が出現した以上、「破られたる扉」式の形容詞的用法が平安時代以後、多量に出現してもよいはずのものであるが、実際にはそうならなかった。「破られたる扉」のような用法が成立するためには、その前提として、

扉が（誰かによって）破られたり。

の如き無生物主語の受動構文があらかじめ成立していなければならない。日本語の伝統的受動構文は、話主や動作主の迷惑や被害を表示するものが主流であり、「受動性」を客観的に把握する構文は存在しなかった。したがって、

この寺は、何年何月に建てられたり。

かかる事態が（何々によって）もたらされたり。

のような無生物主語を取る客観的受動構文や抽象的受動構文は、伝統的日本語文において存在しなかった。この傾向は、現代語の談話にまで及んでいると思われる。我々は、くだけた会話では「この校舎は、おととし建てられたんです。」と言うより、「この校舎は、おととし建ったんです。」という表現の方を好むだろう。あたかも校舎が自力で建ったかのような表現である。日本語文法体系において受動性が積極的に位置づけられなかった理由は、「消ゆ・絶ゆ・燃ゆ」などの自発性語尾に類推して成立した奈良時代以前の「ゆ・らゆ」も、「掛かる・寄そる・当たる」などの自動詞語尾に類推して成立した平安時代以後の「る・らる」も受動性を意味の中核に持たなかったからである。日本人が明確に受動性の存在を認識したのは、漢文の受動性形式である「被・見・所」などを「る・らる」に訓じてからのことであろう。日本人は、言語表現における受動性の概念を漢文訓読を通じて知ったと考えられる。

其の水を決り棄テテ、下に過ギ令（め）ず [不] [於] 決（ら）所たる処、卒に修補すべきこと難し

『西大寺本金光明最勝王經』卷9 平安初期点

後更ニ王有（リ）テ、[知] 其（ノ）仙ノ菓ノ為ニ変（セ）所（レ）タルコト（ヲ）知りテ侍臣ニ謂（ヒ）テ曰（ハク）

『興福寺本大慈恩寺三蔵法師伝』卷4 康和元年点

王朝古典語における動詞の形容詞的用法の資源が専ら自動詞であり、他動詞をこれに動員できないというのは、文章表現上の制約となりうる。他動詞を自動詞に変換することは、英語の過去分詞と同じように、受動形式を他動詞に付加すればよいことになるが、筆者が平安王朝文芸や訓点資料を見る限り、先行文脈から相対的に自立した表現「失われた信用」「破られた眠り」に類するような形容詞的用法を見いだすことは、後述するように極めて少ない。他動詞に受身助辞が付いた例はもちろんあるが、殆どの場合において先行する文脈に統語項を取る例である。

以上のような次第で平安王朝古典語における動詞の過去分詞用法の特徴は、概略次の

ようにまとめられる。

- ①上代語と同様に自動詞を資源とする。他動詞を用いることがないので英語などのように受動性を含意することがない。
- ②き・けり・つ・ぬ・たり・りなどの多様な過去情報を持つ助辞を用いる。
次節において、『源氏物語』におけるこの種の用法の実態を報告したい。

3 『源氏物語』における過去分詞的用法の実態

現在、筆者は平安時代における平仮名文芸全般を対象として、古典語の過去分詞的用法の調査を行っている。これについて、いずれその全貌を明らかにする予定であるが、小稿では平安時代における代表的な平仮名文芸テキストである『源氏物語』を対象にして、本テキストに現れた過去を表示する諸形式「き・けり・つ・ぬ・たり・り」が介入するすべての動詞句の名詞修飾の中から、特に顕著な用法である形容詞的用法（すなわち過去分詞的用法）を網羅して、そこから得られる歴史文法学的情報を考察したい。

『源氏物語』において、「き・けり・つ・ぬ・たり・り」が介入する名詞修飾句は、4546例見いだされた。その内訳の一端を説明する。

次の例のように先行する文脈に統語項を取らずそれ自身でまとまった内容の句を形成するものを形容詞的用法と呼ぶ。

- 1 生まれし時より、思ふ心ありし人にて（桐壺）
- 2 来し方も過ぎたまひけんわたりなれど（夕顔）

またこれに関連して、次のような先行する文脈に接続助辞が介入する並列的叙述や副詞句を取る場合においては、これを名詞修飾句の統語項とは認めず形容詞的用法として扱い、集計した。

- 3 手を折りてあひ見しことを数ふればこれひとつやは君がうきふし（帚木）
- 4 もしかのあはれに忘れざりし人にや、と思ほしよるも（夕顔）

次のように、主格名詞を統語項に取って句を形成するものを集計した。

- 5 生まれし時より思ふ心ありし人にて、故大納言いまはとなるまで（桐壺）
- 6 頭中将なんまだ少将にものしたまひし時、見初めたてまつらせたまひて（夕顔）

次のように、代表的には助詞トによって引用を表示するものを統語項として扱い、集計した。

- 7 光ありと見し夕顔の上露はたそかれ時の空目なりけり（夕顔）

次のように、代表的には助詞ニによって動作、作用の帰着点を表示するものを統語項として扱い、集計した。

- 8 故姫君は十ばかりにて殿に後れたまひしほど、いみじうものは思ひ知りたまへりぞかし（若紫）

次のように代表的には助詞ヲによって動作、作用の対象や目的を表示するものを統語項として扱い、集計した。

9 世にいささかも人の心をまげたることはあらじと思ふを（桐壺）

次のように代表的には助詞ヨリによって動作、作用の起点を表示するものを統語項として扱い、集計した。

10 いときなきよりなづさひし者のいまはのきざみにつらしとや思はんと思うたまへて（夕顔）

次のように代表的には助詞マデによって動作、作用の限界を表示するものを統語項として扱い、集計した。この用例は実際は極めて少なく、「たり」を例にして示す。

11 女はいとものをあまりなるまで思ししめたる御心ざまにて（夕顔）

以上のような作業によって『源氏物語』全体を通じて得た集計結果を次の表に示す。

合計	補助	起点	方向	目的	引用	主格	形容	
1375	54	16	144	101	129	181	750	き
500	45	8	65	37	36	72	237	けり
171	1	2	15	16	12	25	114	つ
149	6	12	34	13	2	32	61	ぬ
1518	9	19	181	181	55	183	890	たり
833	7	14	116	114	36	148	398	り

上の表が示すところによれば、動詞句の名詞修飾全体の中で形容詞的用法の占める重要性が見て取れるであろう。特に動詞の名詞修飾句の中でいわゆる過去回想「き」と完了「たり」が突出して数多く用いられていることが分かる。私見に依れば、完了「たり」の用例が第一位を占めることに留意すべきであると思う。筆者の調査結果によれば『源氏物語』に見いだされた傾向は、平安時代の平仮名文芸作品を全体として貫く特徴となっている。

平安時代仮名文芸テキストに見るこの一般的特徴は、時代を下るにしたがって次第に顕著になっていると判断される。過去情報助辞が介入する名詞修飾句の中で「たり」の用例が突出して多いということが何を意味するのかについては、稿を改めて論ずる必要があるが、とりあえずここでは次の二つの歴史的事実について確認しておきたい。

すなわち、一つは中世以後いわゆる終止形終止の文が姿を消して、連体形による文終止が一般化したことである。連体形による文終止は、動詞のみならず形容詞、形容動詞、さらにはこれらに付属する活用助辞群などおよそ活用する語及び文法形態全体に及んでいる。このことは、日本語が平安時代まで保有していた文終止のための専用形式を中世以後すべて放棄して、連体（名詞）修飾の形式を選択して文終止のために転換したことを示すものである。なぜこのような変化が生じたのかについて、その究極的原因は未だ詳らかではない。さらにもう一つの事実は、過去回想あるいは完了という名で把握さ

れてきた古典語の過去情報を表示する文法形式「き・けり・つ・ぬ・たり・り」など一群の助辞群が中世語において大規模に淘汰され、唯一「たり」の後継形態である「た(だ)」だけが残存したという顕著な事実である。なぜこのような変化が生じたのかについて、その究極的原因は未だ詳らかではない。本稿の考察の範囲内では、このような大問題についての魅力的な解答を準備できない。ただし、中世語における連体形終止の一般化という歴史的現象が、事態の生起する直前の時代における連体修飾の実態から規制を受けたということは大いにあり得ると考えられる。むろん、中世以後今日に至るまで用言の連体修飾機能自体は、そのまま存続している。つまり、平安時代以前の用言の連体形は、中世以後名詞修飾のみならず文終止の機能を得て大幅に勢力を拡大したのである。そうであれば、中世語における過去情報辞「た(だ)」への収束という歴史的現象の原因を解明するには、現象が生起する直前の時代の連体修飾に用いられた種々の過去情報辞の使用実態から規制を受けたということは、あり得ると考えられるであろう。

そのような仮説を実証するためには平安時代語全体の上述の使用実態に関する実態解明が必要である。このような究極的な目的を達するための見通しを持ちつつ、本稿ではとりあえずもっとも用例数が多く、名詞修飾の機能が突出して高いタリの名詞修飾タルの用例に注目し、その中でもっとも旺盛な使用実態を持つ形容詞的用法を網羅、検討したい。

4 『源氏物語』の「たり」が介入する形容詞的用法

前節までの方針に基づいて「たり」が介入する形容詞的用法の実例を以下、網羅する。なお、用例採集に際して使用したテキストは、『日本古典文学全集 源氏物語 阿部秋生・秋山虔・今井源衛校注』(1)～(6) (小学館)である。用例の途中の括弧に巻名を示した。

唐めいたるよそほひ 言ひかはしたることども (桐壺) 軽びたる名 おしなべたる
おほかた もて離れたること うめきたる気色 わろびたること し出でたること
うちとけたる後見 世離れたる海づら 作りたるもの 柔らいだるかた 後れたる
筋 従ひ怖じたる人 萎えたる衣 荒れたる崩れ 今めきたるもの声 踏み分け
たる跡 掻い弾きたる爪音 荒れたる家 恨みたるさま すきたる罪 うちとけ
たる方 さし過ぎたること 乱れたるところ 定まりたること 枯れたる声 おし
なべたるつら すぐれたること 見あつめたる人 なまめきたるさま およすけた
ること うちとけたる御答 (帚木) ねじけたるところ うちとけたる世 そばめた
るうはべ うちとけたる人 あきれたる気色 ざればみたる方 さし過ぎたるやう
老いたる御達 さしはへたる御文 ざれたる心 (空蝉) されたる遣り戸口 もて馴
らしたる移り香 書きなれたる手 やつれたる旅姿 ことさらめきたる指貫 やう

違ひたるもの思ひ 思ひ入れたるさま されたる呉竹 さし当てたるやう すぐれたる
 こと 心ばみたる方 世馴れたる人 翁びたる声 荒れたる門 荒れたる所
 若びたる人 あきれたる心地 浮かびたる心 変りたるところ 書いたるさま 向
 ひみたる人 (夕顔) 奥まりたる山住 法師まさりしたる人 すきたる者 古めいた
 る親 読みたる尼君 おぼえたるところ ゐたる大人 かいやりたる額つき 浮
 きたるやう かれたる声 透きたる袋 年老いたる尼君 忍びたる御歩き 思し乱
 れたるさま 忍びたる所 荒れたる家 荒れたる所 もの古りたる所 うち萎えたる
 ども (若紫) うちとけたる住処 やつれたる御歩き 雲隠れたる道 もて離れた
 る御気色 ひき入りたる方 かどめきたる心 荒れたる篋の子 あだめきたるはや
 り心 荒れたる籬 今めきたるけ 乱れたる心 若びたる声 もて離れたる御心ば
 へ 荒れたる宿 うちとけたる宵居 ひなびたる限り 荒れたるさま 踏みあけた
 る跡 見初めたる人 隠ろへたること むかひたる廊 古めきたる鏡台 (末摘花)
 待ちとりたる楽 なまめいたる筋 吹き立てたる物の音 離れたる対 書きさした
 るやう あざれたる桂姿 ものしたる心 かしこまりたるさま あだめいたる心ざ
 ま 思ひ乱れたるけはひ もてなしたるうはべ (紅葉賀) 年老いたる博士ども
 目馴れたること (花の宴) おしなべたるさま 取りわきたる宣旨 やつれたるけは
 ひ 後れたる筋 なまめきたる方 行ひ馴れたる法師 今めきたる事 枯れたる下
 草 空の色したる唐の紙 けしきばみたること 思し放ちたる年月 引き結びたる
 文 (葵) ものうち言ひたるけはひ うけぱりたるありさま 思しつめたる事ども
 なよびたる方 おぼえたる細殿 さし分きたるさま 大人びたるさま 老い衰へた
 る人 建てられたる御堂 とりわきたる御行ひ なまめきたる檜破子 のどめたる
 ところ 添ひ臥したるところ 添ひ臥したる男 こめたるところ うけぱりたる女
 御 (賢木) 荒れたる宿 (花散里) 思し嘆きたるさま うち荒れたる心 思し召した
 る御気色 すいたる若きむすめたち すぐれたる御心ざし 荒れたるころ 起きた
 る人 すぐれたるかたち (須磨) 焼け残りたる方 作りなしたる心ばへ もの隔た
 りたる下の屋 よしづきたる事 うちしきりたる御とぶらひ なよびたる薄様 し
 めたる紫の紙 書きたるさま 思ひあがりたる気色 下りたる人 住みたるさま
 聞きならしたる琴 忍びかねたる御夢語り とりあつめたるころ (明石) ねじけ
 たるわざ 衰へたる宮仕人 強ひたるさま すいたる人 世づいたる筋 参り来た
 るしるし 奥まりたる人さま (濡標) 古りにたる御厨子 ありつきたるさやうの並々
 の人 古びたる方 立てたる御心 分けたる跡 煤けたる几帳 荒れたる家 漏り
 濡れたる廂 荒れたる軒 見つけたる心地 もの古りたる声 煤けたる御几帳 も
 のつつみしたるけはひ おしなべたる世の常の人 (蓬生) 浮きたる心地 (関屋) 取
 り立てたる御後見 うけぱりたる親さま うちとけたる御童遊び いはけたる御ふ
 るまひ すぐれたる上手 透きたる沈の箱 描き尽くしたる絵 描きながしたるさ

ま 取りたてたる御心 思し召したるさま (絵合) 建てたる寝殿 もてひがめたる
 頭つき 浮きたること 出でおはしましたる御宿世 造りそへたる廊 すぐれたる
 人 うち笑みたる顔 加へたる家子 繕はれたる水の音なひ 隠ろへたるさま た
 をやぎたるけはひ うち静まりたる御物語 (松風) さしむかひたる劣りのところ
 ながめみたる様体 寄せたるところ 田舎びたる心地 ものあひたる心地 磨きあ
 たらめたる御よそほひ 乱れたるところ 思し嘆きたる御気色 むすぼほれたるこ
 と 思し召したるころ 乱れたる露 思ひ忍びたる御後見 うちしめりたる御匂ひ
 (薄雲) 古めきたる御けはひ さぶらひたるついで 暗うなりたるほど 枯れたる花
 大人びたる御文 馴れたる御衣 にびたる御衣 参りたる人 すげみにたる口つき
 来たる老 まろかれたる御額髪 もて離れたる事 降り積もりたる上 しをれたる
 前裁 おびれたるもの よしづきたるところ すきたる人 (朝顔) 始めたる御心ざ
 し せまりたる大学の衆 ひきたがえたる御ことなり 並びたる作法 読みあげた
 るほど あだめきたるところ 来りたる座 栄えたる御家 年経たる人 つくりた
 るもの おれたる事 あざやぎたる御心 すぐれたるさま 浮きたること 世づき
 たる人 乱れたるところ 大人びたる人 およすけたる人 立ちとまりたる心地
 寝たるやう うち馴れたるまみ 思したるさま したてたる様体 書いたる濃墨
 さだ過ぎたる心地 くずほれたる心地 ひらけたる桜 なまめきたる方 すぐれた
 る御手づかひ とりわきたる御思ひ けおされたる秋 (少女) かいそめたるもの
 好いたる田舎人 好きたる心 田舎びたること 思いたるさま 田舎びたる搔練
 行きまじりたるたより 田舎びたる目 鄙びたること 田舎びたること 大人びた
 る上臈 着たるもの 唐めいたる白き小桂 今めきたる言の葉 詠みつきたる筋
 後れたる方 思いたるさま (玉蔓) 大人びたるかぎり あつめたる髭籠 慰めたる
 筋 張りたる一襲 うちとけたるさま つくろひたる御装 荒れたるところ うけ
 ばりたるさま はかなくしたる関伽 もてはなれたること こぼれ出でたるこちた
 さ すぐれたること 情けだちたる筋 あざればみたるかたくなしさ ほのすきた
 る心 (初音) 唐めいたる舟 霞あひたる梢 事そぎたるさま すぐれたるかぎり
 吹きこぼれたる花 とりあへたるやう すぐれたる御労 かどめいたるところ 御
 覧じたる三つ四つ 書いたる気色 静まりたる人 さし出でたる月影 うち世馴れ
 たる人 親がりたる御言葉 (胡蝶) 思ししづめたる御ありさま 愛敬づきたるけは
 ひ 大人びたる人 されたるところ うちしめりたる宮の御けはひ さし放ちたる
 人づて 隔てたる見わたし 世の人めきたるさま 今めきたる裾濃の御几帳 愛敬
 づきたる君 言ひ集めたる中 いつはり馴れたる人 描きたる絵 世馴れたる物語
 立てたるおもむき 生ほしたてたる人 後れたること 言ひ出でたること いはけ
 たる御雛遊び 生ひ出でたるおぼえ (螢) 翁びたる心地 かしこまりたるやう も
 て離れたること 咲き乱れたる夕映え しおきたること 立ち下りたるやう ほき

たること うちやられたる御髪 ざれたる若人 あさへたるさま 愛敬づきたるさま
 誇りならひたる乳母 漂ひたる書様 あまえたる薫物の香 さし過ぐしたること
 (常夏) 離れたる屋 あくがれたる心地 住みたる気配 馴れたる下仕 こぼれ
 かかりたるほど そそけたる薬 摘み出したる花 咲き乱れたる刈萱 馴れたる御
 隨身 思ひおきたる気色 (野分) うちとけたる文 さし過ぎたる心 立てたるところ
 ことさらびたる御もてなし かしこまりたるさま むすぼほれたる心地 あき
 らめたる筋 ものづつみしたる人 し過ちたること 仕へたる御けはひ (行幸) 思
 ひ慰めたる気色 なまめきたるさま 紛れたるおぼえ うち乱れたるところ かし
 けたる下折れ しめたる匂ひ (藤袴) うちとけたる御気色 隠ろへたるさま 乱れ
 たるふるまひ ねじけたること 仕り馴れたる木工の君 分けたるやう なまめい
 たるかたち 思ひおとされたる人 萎えたる御衣 うちとけたる御姿 萎えたる御
 装束 焦がれたる臭ひ 見送りたるさま 酔ひ乱れたるさま たゆめられたる妬さ
 思はせたることども さし当たりたること すいたる人 咲きかかりたるにほひ
 (真木柱) とりわきたる御仲 散りすぎたる梅の枝 引き結びたる糸 掻きたてた
 るほど すぐれたる道々 なまめきたる筋 そばみたる古言 乱れたる草 そそけ
 たる葦 澄みたるところ 浮きたるさま かしこまりたるさま 世馴れたる人 (梅
 が枝) およすけたる方 すぐれたる御心ざし (藤裏葉) とりたてたる御後見 す
 ぐれたる御おぼえ およすけまさりたるおぼえ たぐひたる御あはひ 世づきたる
 ありさま うちききつけたるほど 軽びたるおぼえ おしなべたる際 軽びたるほ
 ど さし当たりたるただいまのこと いまめきたるほど すぐれたる音 掻きあは
 せたるすが掻き すぐれたる声 おし立ちたること すぐれたる際 濡れたる御単
 衣 ととのひはてにたる御けはひ 渡りおはしましたるよし おぼえたる御対面
 咲きかかりたる花 なまめきたるさまごまのかをり 親めきたるさま おとなびた
 るけはひ たちつづきたる御仲らひ おぼえたる物の音 隠ろへたるやう すぐれ
 たる和琴 見えにたること 世離れたる境 泣きはれたるけしき もの思したるさ
 ま 絶えたる峰 ものづつみしたるさま 封じこめたる心地 得たる方 絶え籠も
 りにたる山住 いはけたる遊び すぐれたるらうらうじさ とりわきたる御けしき
 思しおきてたる方 なまめきたるさま しをれたる枝 こぼれいでたる御簾 もの
 怖じしたるけはひ かさなりたるけちめ かき紛れたる際 (若菜上) すぐれたる上
 手 しめたるわが心 隔てたる気色 いまめきたる御心ごまもて離れたる御心
 走り書きたるおもむき 愁へ嘆きたる好き者 すぐれたるかぎり 加はりたる二人
 尽くしたる上達部 ととのへ飾りたる見物 飾りたる装束 ととのへとりたる方
 枯れたる荻 酔ひ過ぎにたる神楽おもて 立て続けたる御車 すぐれたるかぎり
 伝へとりたること 尽くしたる装ひ しみたる御衣 匂ひたる御簾 吹き合はせ
 たる物の音 神さびたる手づかひ 愛敬づきたる御爪音 掻き返したる音 掻き立て

たる調べ 咲きこぼれたる藤の花 およびたる心地 つくりあはせたるやう 吹き
 合はせたるやう こしらへなびかしたる音 うちおほどきたるさま 思し出たるつ
 いで とりあつめたらひたること 乱れたるところ 悔い思したる御気色 おりた
 る間 思ひつめたる片端 世づきたる心ばへ すぐれたる験者 もの恥ぢしたるけ
 はひ 思しほれたるさま 透きたるやう もぬけたる虫の殻 大人びたる人 こと
 さらめきたる書き様 おこたりはてたまひにたる御あつかひ 消え残りたるいとほ
 しみ 思したるさま 取りたてたる後見 もて離れたるさま ゆるされたるありさ
 ま 過ぐしたる筆遣ひ 品おくれたるわざ さだすぎにたるありさま 思しおきて
 たるやう 華やぎたる方 しづめたるさま 事そぎたるさま 情けびたる方 思し
 すてたるやう (若菜下) 馴れたる人 はなやぎたるところ 忍びたる事 おはしま
 いたるついで 弱りにたる人 ものしたるついで わづらひたる人 思しいりたる
 さま もて静めたるうはべ おしなべたるやう 思しいりたるさま 思しゆるいた
 る御気色 (柏木) ねぢけたる色好み うち荒れたる心地 寝たるやう 寝おびれた
 るけはひ うち気色ばみたる思ひやり 睦びそめたる年月 かりたるふしぶし
 (横笛) 染めつけられたる心ばへ 装束きたる女房 絶えにたるめづらしき物の音
 世離れたる住まひ (鈴虫) ほの好きたる方 るたる方 しみたる匂ひ あざれたる
 事 あまえたるさま もの隔てたるやう 懸想びたる文 上がりたるところ すく
 みたるやう めぐらしたる儀式 枯れたる草 さし離れたる仲らひ 棄てたる身
 浮きたる御名 磨きたるやう 乱れたちにてたる人 なよびたる御衣 埋もれたる御
 衣 乱れたる御衣 なまめいたるけはひ 衰へにたるありさま のどめたるところ
 参り馴れにたる心地 (夕霧) 思しそめたる筋 集ひたる響き 静まりたるほど 巢
 離れたる心地 静まりたる御物語 のたまひなしたるけはひ 仕うまつり馴れたる
 人々 乱れたるけしき 仕うまつり馴れたる女房 定まりたる念仏 思しめしたる
 心 (御法) くれまどひたるやう うちとけたる方 埋みたる火 思したるさま 思
 しほれたる御気色 にほひたる顔 ふくだみたる髪 黄ばみたる気 御覧じ馴れた
 る御導師 (幻) 造り占めたる人の家ゐる 思ひあがりたること すぐれたるうつし
 すいたる方 さぶらひ馴れたる女房 およすけたる心さま ほころびこぼれたる匂
 ひ 似たるもの (匂宮) いまめきたる人 澄みたるさま 世づきたるさま なよび
 たる撥音 馴れたる声 すきたる方 さしむかひたる御方々 (紅梅) なまめいたる
 さま かしづかれたるさま 屈じたる名 なまめいたるもてなし うちすぐしたる
 人 澄みたるさま うちとけたる姿 ひき違へたる御宮仕 ひがみたるやう うち
 過ぐしたる人 選ばれたるほど 後れたること おほどいたる心地 後れたる方
 (竹河) ものづつみしたるけはひ 田舎びたる山がつ 聖だちたる阿闍梨 聖だち
 たる御ため なよびたる方 尋ねきこえたる本意 なまめいたる声 さしのぞきた
 る顔 添ひ臥したる人 うち笑ひたるけはひ 濡れにたるかごと 山里びたる若人

濡れしめりたるほど さし過ぎたる罪 いららぎたる顔 濡れたる御衣 埋もれたる身 うち忍びたる住处 山里めいたる隈 書きさしたるやう 古めきたる黴くささ (橋姫) 世離れたるところ 愛敬づきたる音 山里びたる網代屏風 設けたるやう うちあはせたる拍子 ほころび出でたる物の音 領じたる心地 大人びたる人々 生まれたる家 よしづきたる書きざま 気色ばみたるふるまひ 衰へたる人 人めいたる御しつらひ 埋もれたる葎 おどけたる人 参り来たるころごし すくみたるさま 田舎びたる人々 かすみこめたる宿の桜 うけばりたる後見顔 あだめいたる御心ざま 開きたる障子 おほどきたるけはひ (椎本) 結びあげたるたたり 世づきたる方 世籠もりたるほど わろびたる女ばら 棄てたるあたり 懸想だちたること 廊めいたる方 とりあつめたる朝ぼらけ うち紛れたるほど 離れそめたる心 おしなべたる好き者 思したること 作り出でたるもの 思しほれたるやう 立てたる心 すいたる人 すすみたる下の心 とりつくろひたる姿 色取りたる顔づくり 澄みたる気色 ざれたる御心 思ほし入れたるさま 思したる御さま 心ゆきたる気色 人めきたる住まひ 思したること 軽びたるやう もの隔てたるところ むすばほれたる心地 もの思したる気色 軽びたる御心 もの思したるさま るかはりたる声 物の罪めきたる御病 隠ろへたる方 思し嘆きたるさま (総角) 隠ろへたる几帳 浮きたる波 とりわきたる契り 忍びたるさま (早蕨) 忍びたること 知りたること 忍びたるところ まめだちたることども 馴れ仕うまつりたる人々 愛敬づきたる方 隔てたる御心 古めきたるもの 聖だちたるさま 浅くなりたるやう しづめたるさま 萎えばみたるうちまじり 忍びあまりたる気色 召し寄せたる人 練じたる心 散り敷きたる紅葉 し尽くしたる事ども 忍びたるさま 下りたる座 田舎びたる者 おろし籠めたる中の二間 大人びたる人 そばみたるかたはらめ 思しめしたるさま 田舎びたる人 忍びやつれたる歩き (宿木) 田舎びたる心 腰折れたる歌合 け劣りたる心地 浮かびたる事 浮かびたる罪 うけばりたる気色 へつらひたるやう 鄙びたる守 思ひそめたる者 あひあひにたる世の人 書きたる文 隠ろへたる所 かじけたる女の童 ねびにたるさま 児めいたるさま 夷めきたる人 忍びたるさま 忍びたる所 開きたる障子 起き上がりたる様体 見かへりたるさま 離れたる方 鄙びたる心 若びたる声 似たる人 たわみたるさま 気色ばみたる御まかげ 造りさしたる所 うちとけたるさま 残りたる心地 山里めきたる具ども かしこまりおきたるさま 田舎びたる召し 棄てたる身 里びたる簀子 おぼとれたる声 さし出でたる朝日影 老いたる者 見いだしたるまみ 児めいたるもの もてはやしたる作り様 うちとけたる御ありさま 田舎びたること 田舎びたるざれ心 なまめいたる額髪 敷きたる紙 書きたるもの (東屋) もの怨じしたる世の常の人 色取りたる籠 作りたる枝 しなしたる文 貫きそへたる枝 進みたる御心 もの思ひたる気色 む

かひたる人 うちとけたることども 似通ひたるけはひ しさしたるものども 似
 たる御声 添ひ臥したる絵^{かた} うち怨じたるさま もの思したるさま 思ひ乱れたる
 気色 添ひたる身のうさ 見まさりしたる心地 かき集めたる心の内 消え残りた
 る雪 おぼいたる若き人 起きたる心地 されたる常磐木 うちとけたるさま う
 ちとけたる姿 占ひたる物忌み 乱れたる髪 忍びたるさま 造りたる所 忍びた
 る人 浮きたる心地 浮きたること 田舎びたるあたり 色めきたる方 るたる人
 過ちしたるもの 生ほしたてたる人 ほの聞きたること 頼みたるやう さかしが
 りだちたるころ 里びたる声 人離れたる御住まひ (浮舟) 思したる御気色 あひ
 思したるさま たばかりたる人 忍びたること 知りたる老法師 ひきつくろひた
 るかたち しあつめたることども しあつめたるものども 思し嘆きたる気色 失
 せたる人 世離れたる御住まひ 心ゆきたる気色 もてなされたるありさま 軽び
 たるほど 忍びたること 忍びたるやう 笑ひたるまみ まもり立ちたるほど 透
 きたるもの 残りたる絵 すきばみたる気色 翁びはてにたる心地 目馴れたる筋
 開きあひたる戸口 馴れたる大人 押し開けたる戸 あげたるすだれ さし出でた
 る和琴 大人びたる人 (蜻蛉) 亡くなりたる人 出で来たる仮の物 けがらひたる
 人 ねじけたるところ 生きてるわざ 籠もりたる山 憑きたる人 おとろへたる
 者ども 生きとまりたる人の命 住みつきたる人々 今様だちたる御ものまねび
 いららぎたるものども さしあたりたるやう 見出でたる人 思ひ出でたる御まか
 なひ 忍びたるさま 屈したる人の心 いまめきたる人 吹き合はせたる笛の音
 むすぼほれたる本性 うちすがひたる尼ども もてそこなひたる身 飽きにたる心
 地 老い衰へたる人 あきれたる心地 困じたる人 起きたる人 失せたる人 敵
 だちたる人 おはしたる人 澄みたる人 今めきたるかたち 忍びたるさま 恨み
 たるさま (手習) 浮きたる心地 失ひたるやう 過ちしたる心地 茂りたる青葉の
 山 ともしたる灯 思ひたるほど 参りたる人 (夢浮橋)

以上、網羅した実例の語るところによれば「たり」が介入する形容詞的用法に動員さ
 れる動詞の資源は、大多数が自動詞であるという点であろう。これはすでに別稿で確認
 済みのことがらであるが⁶⁾、この点が他動詞を主たる資源とする英語などの過去分詞的
 用法との大きな相違である。ただ、「立つ (下2段)、改む、分く、取り立つ、加ふ (下
 2段)、寄す、見つく、始む」のような他動詞がいくつか存在するのが留意される。こ
 れは奈良時代語になかった特徴であるが、それでも全体的にはごく少数である。英語で
 は他動詞を過去分詞に変換することで先行する項構造から自由になることが出来る。こ
 れと同様の操作は、日本語においては受身助辞を接することによって他動詞を自動詞に
 変換できるはずである。しかしながら実態は、上に見たようにこのような用法は、『源
 氏物語』においては極めて少ない。ところで、前稿において筆者は、『源氏物語』を含
 む平安時代平仮名文芸作品では、他動詞に受身助辞と「たり」が接した形容詞的用法は

観察されないとしたが、今回の調査では次の例のような形容詞的用法に当たる可能性があることが分かった。

- 12 常の御念誦堂をばさるものにて、ことに建てられたる御堂の西の対の南にあたりて（賢木）
- 13 ことさらにゆるされたるありさまにしなして、わが心と罪あるにはなさずなりにしなど、今思へばいかにかどある事なりけり（若菜下）
- 14 花机の覆ひなどのをかしき目染もなつかしうきよらなるにほひ染めつけられたる心ばへ目馴れぬさまなり（鈴虫）
- 15 昔物語に親王の住みたまひけるありさまなど語らせたまふに繕ろはれたる水の音なひかごとがましう聞こゆ（松風）
- 16 嵯峨の大堰のわたりの野山、むとくにけおされたる秋なり（少女）
- 17 世とともに蔵人の君は、かしづかれたるさまことなれど、うちしめりて思ふことあり顔なり（竹河）
- 18 をかしげなる手つきして扇を持たまへりけるながら、腕を枕にてうちやられたる御髪のほど、いと長くこちたくはあらねどいとをかしき末つきなり（常夏）
- 19 いつきむすめのやうにてもものしたまへば、かく思ひおとされたる人の上までは知りたまひなんや（真木柱）
- 20 いかう際々しうとしも思はで、たゆめられたる妬さを、人わろくすべて御心にかからぬをりなく恋しう思ひ出でられたまふ（真木柱）

14、18の「にほひ」「枕」を統語項とすれば、これらは形容詞的用法の例から外れることになる。受身助辞を介した他動詞資源の形容詞的用法は、全体として極めて少ない。これらの用法は、恐らく漢文訓読の語脈に倣った臨時の用法と思しく、談話構造を反映するとは考えにくい。要するに平安時代において他動詞を資源にした動作の結果継続を表示する過去分詞的用法は未発達であり、体系的には存在しないと考えるべきでないだろう。その理由は、前述したように無生物主語をとる受身文が伝統的に日本語の談話構造に欠落していたからである。

本テキストにおいて形容詞的用法に動員される動詞は、複数の文脈に涉って何度も用いられるものが極めて多いのが留意される。このことは、この種の用法が個別の文脈を越えた汎用性の高い文字通りの形容詞的用法であることを示している。以下、複数回用いられる動詞を基本形で掲げる。

居り・荒る・ざる・枯る・老ゆ・古る・萎ゆ・好く・棄つ・書く・透く・立つ・浮く・出づ・絶ゆ・濡る・澄む・生く・屈す・似る・染む・さる・住む・占む・取る・知る・屈ず・馴る・すぐる・呆る・忍ぶ・やつる・乱る・すぐる・後る・ねぢく・衰ふ・作る・鄙ふ・集む・軽ぶ・おぼゆ・紛る・隔つ・あざる・なよぶ・埋もる・わろぶ・浮かぶ・若ぶ・恨む・参る・あまゆ・うづむ・尽くす・思す・開く・

残る・しづむ・里ぶ・煤く・飾る・そそく・にほふ・児めく・年経・おしなぶ・うちとく・さしすぐ・かどめく・今めく・なまめく・さし過ぐ・古めく・あだめく・おしなぶ・添ひ臥す・うけばる・取り立つ・思し召す・隠ろふ・大人ぶ・もて離る・およづく・取り分く・田舎ぶ・唐めく・うけばる・翁ぶ・定まる・つくろふ・もの思す・さだ過ぐ・静まる・人めく・思し入る・なまめく・もて離る・思し召す・けしきばむ・山里ぶ・むすぼほる・咲き乱る・かしこまる・聖だつ・思し嘆く・愛敬づく・ものつつみす・山里めく・仕う奉り馴る

これらの動詞の形容詞的用法は、臨時一語的なものと異なって汎用性が高く意味表示も極めて安定的である。これらが用いられる文芸テキストの言語は、流動する談話と違い、言語の不易性を担保する貯水池としての役割を果たしうらうだろう。現に上記の動詞の形容詞的用法には、現代語において用いられるものも多いのである。

5 結論と今後の課題

以上、王朝古代語の代表的テキストである『源氏物語』に現れた動詞の過去分詞的用法の特徴をまとめると次のようになるだろう。

すなわち、本テキストの過去分詞用法の資源動詞の大多数が奈良時代に引き続いて自動詞であった。この事実は、平安時代においても他動詞を自動詞に変換するシステムが依然として貧弱であったことを示すものである。奈良時代において他動詞を自動詞に変換しうる助辞「ゆ・らゆ」の文法的機能は全く期待できなかった。平安時代以後成立した「る・らる」は、「ゆ・らゆ」に比べて大幅に機能が向上したが、『源氏物語』の実例を見る限り、なお不十分であったことは否定できない。その理由は、「失はれたる信頼、忘れられたる約束」のごとき、他動詞と「る・らる」を連結した過去分詞用法が成立するためには、「信頼が失われたり 約束が忘れられたり」のタイプの無生物受動文が前提的に成立していなければならない。しかし『源氏物語』の実態は、平安時代語において談話レベルはもちろん、文章語においても無生物受動文が体系的に欠落していたことの反映であろう。

「る・らる」もまた「ゆ・らゆ」と同様に本義が自発であって、文法体系における受動性の把握が明晰を欠いていた。それ故、古典語では、主語が生物であるか無生物であるかを問わず自由に受動性を表示できる段階に達しておらず、主観的な迷惑や被害を表現する程度にとどまった。明晰な受動性の認識は、日本人が古代では漢文訓読を通じて、近代においては欧文翻訳を通じて経験したのであり、これらの影響によって徐々に日本語文の受動表現は自由度を増大させたと見られる。

次に、本テキストに現れた過去表示助辞群「き・けり・つ・ぬ・たり・り」の中で、

連体修飾の機能において突出した地位にあるのが「たり」であったことが留意される。本稿では『源氏物語』だけを取り上げたが、筆者の調査によれば同様の現象が平安時代の平仮名散文文芸のテキスト全体に一貫しており、平安時代における談話構造の基層を形成する特徴であったことが想定される。過去辞が介入する連体修飾節に占めるこのような「たり」の圧倒的地位は、中世以後の連体形終止の確立と過去辞の「たり」一極収束とが連動する事柄であった可能性を示唆する。すなわち、連体形終止の確立は、形容詞や活用する助辞群をも含む用言全体に及んだ現象であって、用言の名詞修飾の機能を選択的に特化して文終止の形態としたものであると考えざるを得ない。その意味で、これが起こる直前の時代の名詞修飾の実態が後続の時代の文終止の有り様を強く規定したということは大いにあり得ることと思われる。なお、この点についてはより詳細な考証を必要とする。

注

- 1) 拙著『古代日本語の形態変化』第5章（和泉書院、1996）
- 2) 拙稿「奈良時代語の述語状態化形式として成立したり・タリ・ナリ」『国語学』第54巻5号（国語学会、2003）
- 3) 荒木一雄、安井稔『現代英文法辞典』「past particle（過去分詞）」（三省堂、1992）A Comprehensive Grammar of the English Language (17.101) Longman, London and New York 1985
- 4) 本居春庭『詞通路』「詞の自他の事」（文政12年1829刊）
- 5) 金水敏「受動文の歴史についての一考察」『国語学』第164集（国語学会、1992）「受動文の固有・非固有性」『近代語研究』第9集（武蔵野書院、1993）
- 6) 注1) 拙著